

## 分担研究「学習障害に関する研究」の総括

分担研究者 長畑正道

要約：3つのリサーチクエスションに分けてまとめる。①学習障害の定義は1988年の全米学習障害合同委員会のそれを一部修正して用いる。②学習障害の中核性障害の研究には事象関連電位が有用である。③学習障害への対応には、神経心理学的診断が必要で、K-ABCを他の検査と併せて用いる。指導はサブタイプ別に特性に応じて進めていくことが重要である。注意欠陥多動障害の判定には質問表を活用し、合併する他の行動異常にも十分留意し、児童精神医学的対応をはかる。

見出し語：事象関連電位, K-ABC, 学習障害リスク児, 注意欠陥多動障害, 広汎性発達障害

### 1. 研究方法

小児神経学、児童精神医学、教育心理学、言語病理学の専門家で班を組織し、リサーチクエスションごとにグループを編成し研究を行った。平成5年10月5日に分担研究会議を開催し、研究の進め方について協議を行い、平成6年2月18日の全体会議で研究結果を発表した。

### 2. 研究結果のまとめと考察

3つのリサーチクエスションに沿って研究結果のまとめを行い、それぞれの結果について考察を行うことにする。

#### 1) 学習障害の定義はいかなるものか

学習障害の定義としては、1988年全米学習障害合同委員会のそれを一部修正して用いるのが適当

である(栗田 広)。この結論は文部省の調査研究協力者会議の見解とも一致している(上村菊朗)。主要な修正点は精神遅滞と明確に区別するために、「全般的な知的発達に著名な遅れはない」という語句を入れる点である。診断基準については今後なお検討を続ける必要がある。なお高機能広汎性発達障害と学習障害は診断上かなり重なり合う結果が得られたことは注目すべき点である。

このように学習障害の定義としては全米学習障害合同委員会のそれを一部修正して用いることでよいとの結論に達したと考えてよいと思われる。

#### 2) 学習障害は中枢性の障害によるものか

学習障害児は脳波、CT、生化学的検査では70%が異常を示さず、通常の小児神経学的検査や診察

方法では不十分である(竹下研三)。しかし、事象関連電位でP300、あるいはミスマッチnegativityでは正常児と比べ潜時の延長や課題刺激の種類によって差がみられ、その有用性が明らかとなった(宮尾益知、加我牧子)。前年度の研究で音像定位検査(加我牧子)の有用性も確かめられたが、今後は学習障害のサブタイプ別に事象関連電位にいかなる差があるか追求して行く必要がある。

なお、MRI、PETによる研究も今後の課題である。

### 3)学習障害に対する対応方法は

対応方法としては、神経心理学的診断、指導方法、および合併する行動障害に分けて検討していく必要がある。神経心理テストとしてはWISC-Rなどの検査に加えてK-ABCを併用して行くことで個人内差がさらに明らかになることが明らかにされた(前川久男)。また指導に当たっては読み書き障害には音韻操作、視覚認知、構音運動のいずれかに障害のあるサブタイプがあり、算数障害には視空間認知に障害のあるタイプもあり、学習障害のサブタイプ別に指導方法を変える必要があることが示された(大石敬子)。また学習障害に合併することの多い注意欠陥多動障害には行動評価表のほかContinuous Performance Testなどの実験室テストでの評価も併せて行うなど多面的な検査が必要である(関亨、橋本倫太郎)。

以上のように対応方法は神経心理学的評価、サブタイプ別の評価、注意欠陥多動障害その他の行動異常の診断・治療を念頭において進めて行くことが重要である。

全般的考察として、学習障害の定義はほぼ解明され、学童期の神経心理学的診断や指導の進め方

についてはその方向づけがなされたといえる。しかし、中枢性障害の解明や幼児期の学習障害リスク児の対応については今後の大きな課題である。

### 3.研究成果の活用方法

学習障害の定義はほぼ明確にされたので、今後はこのことを普及して行く必要がある。

中枢性障害の医学的検査として、事象関連電位が有効であるので、いろいろなタイプの学習障害について事象関連電位による検査を広く実施するようにする。

対応方法として、診断・判定に当たり2歳半から適用可能な神経心理テストであるK-ABCを他の心理検査と併用して広く用いるべきである。また学習障害の指導にはサブタイプ別にそれぞれの特性に応じた訓練を実施すべきである。注意欠陥多動障害の診断には関らの質問表の活用をはかると共に、合併する行動異常に対して児童精神医学的対応を適切に行うようにする。

### 4.今後の課題

①学童期以降の診断基準としてDSM-III-Rの学習能力障害のそれをさらに検討する。幼児期では、言語および話し言葉の障害、運動能力障害、その他、の基準をさらに検討する。

②神経心理テストバッテリーとしてK-ABCと他のテストをどのように組み合わせるべきかを明らかにすると共に、サブタイプを確定し、適切な指導に生かせる方法を探究する。

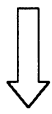
③中枢性障害の解明に向け、事象関連電位、MRI、PETなどの研究を推進する。

④幼児期の学習障害リスク児の早期発見、早期対応の方法を確立する。リスク児として極小未熟児に特に留意する。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:3つのリサーチクエストionsに分けてまとめる。 学習障害の定義は1988年の全米学習障害合同委員会のそれを一部修正して用いる。 学習障害の中枢性障害の研究には事象関連電位が有用である。 学習障害への対応には、神経心理学的診断が必要で、K-ABCを他の検査と併せて用いる。指導はサブタイプ別に特性に応じて進めていくことが重要である。注意欠陥多動障害の判定には質問表を活用し、合併する他の行動異常にも十分留意し、児童精神医学的対応をはかる。